

巻頭特集

小川原湖と 生きる町

はるか太古は海であった小川原湖。
気の遠くなるような時間を経て、
今のカタチになりました。
東北町の人々もまたこの湖とともに生き、
子どもから大人へ成長していきます。
小川原湖と寄り添いながら育んできた
文化、歴史、産業、生活、
そして絆。
小川原湖を知れば知るほど、
東北町の「かけがえのないもの」
があります。



小川原湖

Lake Ogawara

青森県上北郡東北町にある汽水湖。日本の湖沼では11番目の面積規模を有する。最深部は25^{メートル}に達するが、岸から200^{メートル}程度までは水深2^{メートル}前後の浅瀬が広がる。海面水位が湖面水位より高くなる時期には海水が高瀬川を逆流し、湖に注ぎ込む。小川原湖周辺には尾駁沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、内沼、姉沼などの湖沼群が分布しており、これらを総称して小川原湖湖沼群と呼ぶ。



マークのついた画像にスマホをかざすと小川原湖の空撮動画が見られます。
無料アプリ「COCOAR2」を検索してインストールしてください。

小川原湖と 生きる町



湖の幸 宝の恵み

県内最大の汽水湖である小川原湖。
淡水魚と海水魚が生息する
天然の宝湖です。

【シラウオ】
水揚げ量日本一を誇る体長10センチ余りの細身な小魚。シラウオ漁期間の9月～3月、東北町では生きたシラウオをそのまま食べる「踊り食い」もできる。生食が苦手な人は天ぷらやかき揚げもおすすめ。

【ヤマトシジミ】
鋤簾じよれんという昔ながらの道具を使って漁獲する「ヤマトシジミ」。小川原湖産は15ミリ以上もある大きさが特徴で、昔から疲労回復や肝臓に良いとされる。冬の寒シジミ、夏の土用シジミは特に味が良いと評判。

白魚

蜆

蟹

公魚

【モクスガニ】
モクスガニは全国の川や河口域に生息する小ぶりの蟹で、はさみにみっちり毛がついているのが特徴。東北町では殻ごとつぶしてザルでこし、濃厚なカニエキスを抽出する「ガニ汁」が定番の料理だ。

【ワカサギ】
シラウオと並んで水揚げ日本一を誇る硬骨魚。旬の1～3月、氷が張れば湖面に穴を開け、釣り糸を垂らす「ワカサギ釣り」もできる。釣ったワカサギはその場でフライにするのがなんとも美味。



モクスガニのガニ汁



ワカサギの天ぷら



シラウオの刺身



シジミ汁

小川原湖がもたらす
湖の恵み

八甲田山系の豊かな自然に囲まれた小川原湖は、高瀬川により太平洋とつながる汽水湖です。海水と淡水が交じり合うため、ミネラルが豊富なのも特徴です。昔から「宝沼」とも呼ばれ、獲れる魚介類も実に多様です。全国一位の漁獲量を誇るワカサギ、シラウオをはじめ、ヤマトシジミにウナギ、モクスガニなどがあり、一年を通して漁ができるのも特徴の一つ。また水産資源を守るため、「ヤマトシジミは殻長15ミリ以上の大きさのみを漁獲」と取り決め、漁の定量化を図るなどの取り組みが小川原湖漁協を中心に行われています。

こうした湖の恵みをおいしくいただく文化も育まれてきました。定番の「シジミ汁」や「シラウオの刺身」、「ワカサギの天ぷら」、「モクスガニのガニ汁」のほか、シジミをふんだんに使った「シジミラーメン」や、湖の幸たっぷりの新名物「宝湖わんこ井」が町内飲食店で堪能できます。

小川原湖と 生きる町

Activity

駅伝の町、新時代へ

大人も子どもも爽やかな湖畔の風を
浴びながら駆け抜ける。



Activity



豊かな自然。しずかな湖畔



小川原湖公園内の高台に位置するふれあい村は、展望台、カナディアン風のケビンハウス、オートキャンプ場、コインシャワーなどを備えたレクリエーション施設。パターゴルフ場、野外遊具もあるので子どもと一緒に楽しめるスポットです。

小川原湖ふれあい村

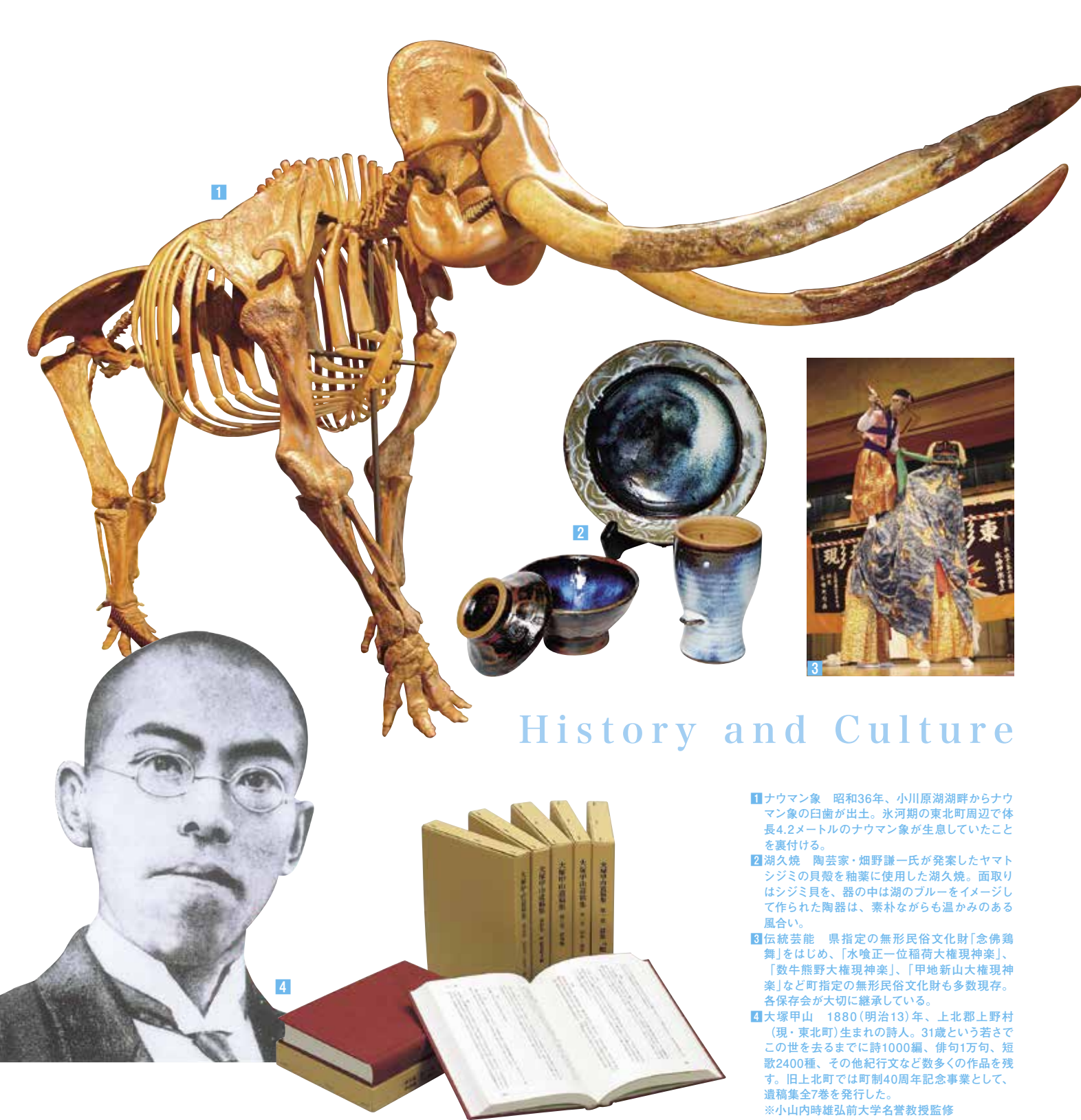
- 1 わかさぎマラソン大会 毎年7月に開催される小川原湖畔を走る大会。種目は2ndからハーフまで
- 2 総合運動公園 町の南北にある2つの総合運動公園。充実の設備で町民の健康をサポート
- 3 湖水浴場 7/1～8/31まで遊泳可能な湖水浴場。遊泳区域内はシジミ採取もOK
- 4 キャンプ場 湖畔に面した保安林の中にあり、炊事場、トイレ、シャワーなどを完備
- 5 湖水スポーツ 夏場になるとカヌーやマリッジットなどのウォータースポーツも人気

また、町には南北二つの総合運動公園が整備されており、屋内外を問わずトレーニング可能な環境が整っています。このほか小川原湖周辺では親子や友人と楽しめる様々なアクティビティが充実。シジミ採りや湖水浴、カヌーやマリッジットといったウォータースポーツ、キャンプやワカサギ釣りなど、小川原湖の美しい四季の移ろいを感じながら一年を通して楽しめるのも魅力です。

県内全市町村が参加する青森県民駅伝競走大会で総合優勝3回(平成28年現在)、町の部では平成7年から13年連続優勝を果たすなど駅伝が盛んな東北町。平成3年には「駅伝の町」を宣言し、箱根駅伝を走るランナーを輩出するなど輝かしい成績を残しています。毎年7月には東北町湖水まつりの初日に「わかさぎマラソン大会」が開催され、県内外から1700人を超えるランナーたちが集結。ゲストラランナーとともに爽やかな風を浴びながら小川原湖畔を駆け抜けます。小川原湖畔は起伏の少ない平坦なロードが特徴で、初心者にもやさしいコースです。

スポーツを通して
心身ともに健康に

小川原湖と 生きる町



History and Culture

- 1 ナウマン象 昭和36年、小川原湖湖畔からナウマン象の臼歯が出土。氷河期の東北町周辺で体長4.2メートルのナウマン象が生息していたことを裏付ける。
- 2 湖久焼 陶芸家・畑野謙一氏が発案したヤマトシジミの貝殻を釉薬に使用した湖久焼。面取りはシジミ貝を、器の中は湖のブルーをイメージして作られた陶器は、素朴ながらも温かみのある風合い。
- 3 伝統芸能 県指定の無形民俗文化財「念佛鶏舞」をはじめ、「水喰正一位稲荷大権現神楽」、「数牛熊野大権現神楽」、「甲地新山大権現神楽」など町指定の無形民俗文化財も多数現存。各保存会が大切に継承している。
- 4 大塚甲山 1880(明治13)年、上北郡上野村(現・東北町)生まれの詩人。31歳という若さでこの世を去るまでに詩1000編、俳句1万句、短歌2400種、その他紀行文など数多くの作品を残す。旧上北町では町制40周年記念事業として、遺稿集全7巻を発行した。
※小山内時雄弘前大学名誉教授監修

悠久の歴史がよみがえる



小川原湖と共に歴史を歩んできた東北町の歴史と習俗を知ることができる施設です。巨大なナウマン象の全身骨格標本や、十数万年前のトラの下顎の化石などインパクトある展示をはじめ、小川原湖の自然や生息する数多くの動植物をジオラマで再現した「四季をうたう小川原

湖」、古屋敷貝塚の出土品や縄文人骨を展示した「東北町のあけぼの」、大塚甲山ら町出身の先人を紹介する「先人記念コーナー」、郷土に残る農具や民俗を展示した「くらしと伝統文化」コーナーなど常設展示も充実しています。

歴史民俗資料館



History and Culture

美しき姫の伝説

玉代姫と勝世姫の眠る地は
伝説という名の彩をまとう。

優しき二人の姫の伝説
悠久の時に思いを馳せて

今から1300年ほど昔、京の都に橘中納言道忠公という人がいました。道忠には二人の美しい娘がおり、幸せに暮らしていました。ところがある日、屋敷を賊に襲われ、重臣を失ってしまふのです。悲しみにくれた道忠は都から姿を消し、やがて小川原湖のほとりに庵を構えました。一方、二人の娘は父・道忠を探すために旅に出ました。諸国を巡り、ようやく小川原湖のほとりに辿り着くのです。しかし父がすでに亡くなっていることを知り悲嘆にくれていると、夢枕で父の声を聞きます。誘われるままに姉の玉代姫は「姉沼」に入り沼の主。一方、妹の勝世姫も姉の後を追うべく沼の主になろうとしたその時、鰐ざめが現れ、襲いかかってきました。姫は大蛇となり三日三晩戦い続けたその時、忽然と道忠が現れ、鰐ざめを漆玉のうしろにあった沼に投げ入れました。以来、その沼は勝世姫の「妹沼」となり今の小川原湖となりました。現在、湖畔には八甲田の恵みを仰ぐ玉代姫の姿と、湖の安全と幸せを祈る勝世姫の姿像があり、訪れる人々に姉妹の優しい思いを今に伝えています。